

外伝 その4

《台風》

戦後に日本に大被害をもたらしたカスリーン台風など、この時期だけ、英語名になっているのは、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の占領下、アメリカ方式の名前が付けられたからです。

日本で使われている台風「〇〇号」は、台風の名前としては、国際標準ではありません。むしろアメリカ方式の固有名詞が付けられます。当時は、女性の名前でしたが、現在は、男女同権の考え方から、女性名・男性名、交互に付けられます。

アジアでは、日本を含む14カ国共通の名前が付けられます。各国から提案された言葉が、144個登録され、6年ほどで一巡すると、繰り返す仕組みです。（注1）来週上陸が予測されている台風21号は、アメリカが提案した「ラン（嵐）」という名前です。

また、「台風」（注2）は、北西太平洋での表現で、同じ強い熱帯性低気圧を、大西洋と北東太平洋では「ハリケーン」（注3）、インド洋では「サイクロン」（注4）と呼ばれます。その強さは、中心部の気圧ではなく風速でランク付けされるのが、国際標準です。

気象予測情報は、各国はもちろん、国際的組織や民間企業のデータが、地球上をシームレスに飛び交い、提供がなされています。現在、日本では、東京オリンピック・パラリンピックに向け、世界最先端の新型レーダーが試験運転中であり、その情報をもとに瞬時に氾濫浸水予測できるシステムが開発中です。

先日公開されたアプリ「どしゃぶる Jr.」は、現在の雨レーダー（X レイン）情報を、土砂崩れ現象に関連付けたものですが、こうした国産アプリも、新型レーダーにも対応しながら、国際的にも通用する使い勝手の良い情報を提供し、その情報が、各国の被害軽減はもちろんインフラ管理にまで組み込まれていければ素晴らしいと思います。

注1：このルールは、北西太平洋または南シナ海で発生する台風防災に関する各国の政府間組織である台風委員会（日本含む14カ国等が加盟）において、2000年（平成12）から、北西太平洋または南シナ海の領域で発生する台風には同領域内で用いられている固有の名称（加盟国などが提案した名称）を付けることに決定されてからです。日本からは、「ヤギ」「コグマ」といった星座の名称が10個登録されています。

注2：「台風」は、ヨーロッパ諸国で使われていた“typhoon”が、日本で明治時代に“颱風”と当て字され、戦後に略字の“台風”となったものです。

その“typhoon”の由来は2つあって、中国の福建省や台湾地方で使われていた“大風”を音訳した説と、ギリシア神話の風の神“typhoon”（チュフォン）からきた説があります。

注3：「ハリケーン」は、スペイン語の“huracan(うらかん)”が転化したものとされます。

huracan とは、古くはカリブ海沿岸地方の暴風の神様の名称です。

注4：「サイクロン」は、“回る”意味のギリシア語が語源です。

写真は、①パシフィックコンサルタンツ（株）が公開した「どしゃぶる Jr.」のアイコン、
②「どしゃぶる Jr.」の概要（i p h o n画面より）



どしゃブル Jr.

高解像度レーダ雨量と土砂災害関連…

開く

